はじめに

中務哲郎教授は本年 3 月 31 日をもって京都大学大学院文学研究科を定年により退職される．昭和 62 年 4 月に京都産業大学より京都大学文学部西洋古典語学西洋古典文学講座（平成 8 年 4 月の改組により京都大学大学院文学研究科西洋古典学講座）に助教授として着任以来，故岡道男名誉教授とともに，また，平成 6 年 4 月以降は主任教授として西洋古典学研究室を支えてこられた．

中務教授は京都大学において松平千秋先生と岡道男先生の薫陶を受けられた．西洋古典学が人間とは何かという問いに連なるあらゆる学問分野を総合した大きな視座から出発しているとすれば，両先生が実践された学問と人生の一致を間近から見つめ，学び，受け継いでこられた．

学術的成果は，ギリシア文学に主要な関心を置きながら，ホメーロスとヘーシオドスの叙事詩，イソップの寓話，ヘーロドトスの歴史，ギリシア悲劇および喜劇，プトレマイオスの地理学，古代小説や随想などの散文作品といった諸ジャンルを幅広く扱う一方，広範な研究対象を統合する基盤を伝承および文化伝統，つまり，人間が人間であるための営みの継承に求めた．研究の精華は博士論文をもとにした著書『物語の海へ――ギリシア奇譚集』に結実している．古今東西の境界を越えて海のように一つに通じ合う物語と物語，それらの動的連関性をギリシア・ローマにとどまらず，ペルシアからインドを含む東洋に目配りして考察し，物語伝承の本質に迫る洞察を示した．また，『イソップ寓話の世界』（は新書の体裁ながら，イソップとは誰か，寓話とはどのような伝承の営みか，という根本的な問いに答えるべく，テキストの精査と研究文献の博捜の上に構築された成果である．その他，個別的成果については「著作目録」に記すとおりであるが，そこに現れないお仕事として，断片まで網羅した画期的な『ギリシア悲劇全集』全 13 巻（岩波書店，平成 2-5 年）の実質的な編集への参与，未邦訳の重要作品を集めた「叢書アレクサンドリア図書館」全 12 巻（国文社，平成 6-15 年）の監修，また，キケロー選集』（岩波書店，平成 11-14 年），『ギリシア喜劇全集』（岩波書店，平成 20 年より刊行中），京都大学学術出版会「西洋古典叢書」の編集を担われている．

お人柄については，松本仁助先生よりご寄稿いただいた「中務哲郎さんの思い出」にも触れられている．その一方，文は人を表わすの言葉どおり，エッセイ集『饗宴のはじまり』からは，古典の伝統の根本である「死すべき人間」という認識に立った謙虚さ，それゆえにまたすべてを揺るがせにしない誠実さが窺える．

京都大学文学部が大学院重点化したとき，西洋古典学研究室にとってもっとも大きな影響は，研究室に置かれた日本西洋古典学会事務局の仕事をそれまで担当していた助手を失うことであったが，中務教授は雑務も厭うことなく，同時に，内外の研究機関，研究者のあいだの交流を結び，学会活動の中心的支柱役を果たしてきた．大学をめぐる状況が厳しさを増す現今，平成 15 年 4 月からは 2 年間評議員を務めるなど，学内行政にも力を尽くされてきた．

その中で中務教授が第一に心を砕いてこられたのは日本での西洋古典学の発展であり，そのために時代を担う若い研究者の育成である．そのことは，松本先生，岡先生とともに『ギリシア文学を学ぶ人のために』『ラテン文学を学ぶ人のために』を編まれたこと，また，平成 9 年 4 月にセントアンドルース大学よりエリザベス・クレイク教授（古典文化学担当，平成 14 年 3 月退官）をお迎えしたことにも現われる一方，なにより，授業においても論文審査においてもテキストの一語として決しておろそかにしない細心厳密な指導に示された．ご指導の何分の一かに応えるべく，『西洋古典論集』XXII を中務哲郎教授に献げたいと思う．

本号には期せずして，ジャンルのみならず，地域や時代までもバラエティに富む論考が集まった．これも中務教授が築き上げてこられたものに多少とも見合うとすれば，編集に携わった者にとって喜びとするところである．

平成 22 年 3 月　高橋宏幸